

## 江東の掘割・川 ②

## 元水場の掘割 — 「堀割網」の原型 —

江東区深川江戸資料館

江東地域の掘割・川を紹介するシリーズの第2回目です。今回は江戸初期隅田川沿岸に開かれた運河と江東地域の開発について紹介しましょう。

隅田川沿岸の開発・深川<sup>りょうしまち</sup>獵師町

小名木川が開かれ、その北岸に深川村が成立してから約30年後の寛永6年(1629)、小名木川以南の隅田川沿岸に大きな動きがありました。このあたりは隅田川上流からもたらされた土砂により、いくらか土地が高く、「半島状の陸地」がありました。その陸地を開拓して町を造り、漁業を営みたいとの願い出が届けられました。

幕府はこの願いを聞いて、月3回の魚介類献上と人や物資運搬の際に役船を調達することを条件に漁師たちの居住を許し、「深川<sup>りょうしまち</sup>獵師町」が成立しました(当時の史料では生き物を捕えて生業とする人は「獵師」と表していたので、「漁」ではなく「獵」の文字をあてています)。当初は8人の人々が開発の代表だったことから、「藤左衛門町<sup>とうざえもんちょう</sup>」「弥兵衛町<sup>やへまらちょう</sup>」「相川町」「熊井町」などと、人名を町名にして「獵師町八ヶ町」と呼ばれました。現在の江東区清澄・佐賀・福住・永代などの地域にあたります。

こうして深川の隅田川河口部に漁師町が造られ、小名木川南岸の開発が進みました。

## 京橋桶町の大火

しかし、深川<sup>りょうしまち</sup>獵師町の周辺は成立から10年余り後さらに大きな変化にさらされました。

それは江戸の大火が原因でした。寛永18年(1641)正月29日夜、京橋桶町(現中央区京橋1・2、八重洲2付近)から出火した火事は、烈風によって燃え広がり、翌日の夜まで江戸の中心部にあたる町々を焼き尽くしました。『寛永日記』には「町屋九拾七町、屋敷数千九百貳拾四軒、但し桶町より南八芝宇田川橋迄(増上寺の東方)、西ハ浅生(麻布)、東ハ木引(挽)丁(現中央区銀座辺)迄也」と被害の大きさを伝えています。

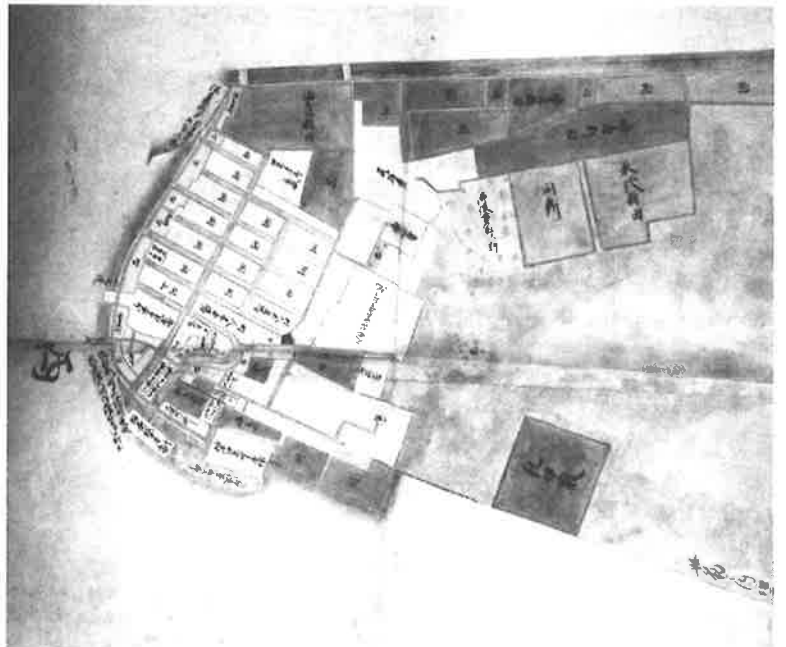


図1 「深川総画図」 年代不詳ながら、江戸初期の深川を描いている。左方が隅田川沿岸で「半島状の陸地」が示されている。(深川江戸資料館蔵)

大火後の検証でこの周辺に高積みされた材木が延焼の原因だったことが分かりました。江戸幕府が開かれて40年ほどを経た江戸の町は、まだまだ拡大する時代でした。江戸城外郭外堀<sup>がいかくそとぼり</sup>の工事が終わったばかりで、武家地も町場も建設ラッシュの時代が続き、材木はいくらでも必要な時代でした。

ことに通町筋(現中央通り)の東方は櫛<sup>くし</sup>の歯状の入り堀が南北に9本造られて石材や材木の集積地となり、日本橋本材木町と呼ばれていました。さらに神田川辺などにも材木置場があり、江戸の材木需要を支えていましたが、江戸市中の火災のたびに建築用の材木が延焼を促しているとなれば、どこかへ材木置場を移す必要があります。

そこで深川が新たな材木置場として選ばれました。江戸市中の日本橋本材木町・神田佐久間町・神田久右衛門町・三十間堀・本八町堀辺の35ヶ町の材木商に深川の隅田川沿岸に設けられた材木置場が与えられました。

## 深川の材木置場

隅田川沿岸の深川<sup>りょうしまち</sup>獵師町周辺は、こうして材木置場

へと大きく変わりました。その時、材木の運搬・貯木のために掘割が開かれました。

図1では碁盤<sup>ごばん</sup>の目状に掘割が開かれているようすがよく分かります。隅田川に沿って3本の掘割に橋が架けられています。北から上之橋・中之橋・下之橋と呼ばれ、いずれの橋も材木問屋<sup>いかだ</sup>の筏や船が通行しやすいように橋台地を高く盛り上げて橋を架けていました(『江戸町方書上』)。これで江戸の「材木置場といえは深川」が定着しました。

材木置場の範囲は隅田川から現在の清澄通りの間ということになります。かつて獵師町だった頃にこのあたりに開かれた寺院や江戸市中から移ってきた寺院などが清澄通りの東側に軒を連ねて建立されていました。今の清澄通りを北から歩いてくると、右手には材木置場が広がり、隅田川対岸の箱崎<sup>れいあんじま</sup>・靈巖島方面まで眺められたのかもしれませんが。また左手には寺の山門や本堂が立ち並ぶといった独特の景観が展開していたこととなります。

## 元禄の木場移転

深川に木場が移されてから、江戸市中もより大きな都市へと拡大していきました。明暦3年(1657)の明暦の大火<sup>めいれき</sup>(振袖<sup>ふりそでかじ</sup>火事)では、本郷から出火して江戸市中が焼け、10万8千人の被災者を出しました。

この大火後に隅田川以東の本所深川の開發が計画され、「川向こう」と呼ばれたこの地域が江戸市中に取り込まれていきました。

この時に北方の本所は旗本・御家人の屋敷町として位置付けられました。隅田川には両国橋が架けられ(寛文元年 1661年)、縦横に道路が整備され、豎川が開削されました。また水はけを良くするために南北2本の割下水も作られました。

その南方の深川は、海岸に近く隅田川対岸には日本橋・京橋の大問屋街があったことから、江戸の流通の拠点として位置付けられました。そこで、隅田川の河口周辺を、さまざまな物資が集積する「蔵の町」にすることが考えられました。そのため材木置場の移転先がまた課題となり、東方の入り江を埋め立てて、そこへ材木置場を移すことになりました。元禄11年(1698)頃から幕府はこの入り江の埋め立てに着手します。貯木・運搬用の掘割を開き、周辺の造成された土地を日本橋周辺の商人が買い取り、町場が造られていきました。こうして元禄14年(1701)新しい木場が誕生しました。

それと同時に材木置場が移転したあとの隅田川沿岸

には21ヶ町の町が造られて「元木場二十一ヶ町」と総称され、新しい木場周辺にも二十四ヶ町の町が開かれました(築地二十四ヶ町)。こうして江東地域は18世紀初頭の元禄末に、土地自体が大幅に拡張し、より広い町場になりました。

## 掘割の延伸

この新たな土地の造成によって、すでに元木場周辺に開かれていた掘割を東へと延伸することになります。こうして開かれた掘割が仙台堀・中之堀・油堀でした。また当時の地図と現在の地図を照合してみると、南北に流れる運河などもこの当時のものが残されています。

仙台堀は隅田川河口に仙台藩蔵屋敷<sup>くらやしき</sup>があったことから名付けられました。河口付近は排水機場になって暗渠<sup>あんきょ</sup>になりましたが、東に伸びて大正11年(1922)から開削された砂町運河と結び、昭和40年(1965)には運河もあわせて仙台堀川となりました(図2)。

中之堀は短い掘割ですが、佐賀2丁目に現在もその一部が残っています。堀沿いに土蔵が8戸並んでいたことから付近を「八戸前<sup>やとまえ</sup>」と呼んでいました(『江戸町方書上』)。油堀は沿岸に油商人の会所<sup>かいしょ</sup>があったことにちなんだ名前ですが、昭和50年(1975)から翌年にかけて、木場の新木場への移転にあわせて埋め立てられました。

仙台堀の川幅は20間(約36m)、油堀は15間(約27m)です。こうした川幅の広い運河には枝状の小河川が作られて、掘割同士を結び、地域全体の掘割が一体化して河岸地や船の繫留<sup>けいりゅう</sup>などに使用されました。こうして当初は材木置場の貯木・輸送用に開かれた掘割が、東方の土地造成・材木置場移転によって延伸され、「掘割網」が形成されて深川にあらゆる物資が集積し、「江戸の蔵」としての役割を担うきっかけとなりました。



図2 現在の仙台堀。木更木橋より東方